

「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」翻刻（その一）

加藤 浩司

はじめに

ここに翻刻し紹介する「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」という資料は、加藤が十五年ほど前にとある古書店から購入した江戸後期頃の刊本「両点本法華経」全八帖のうち、第二帖の裏面にほぼ全帖に渡り書写されていたものである。加藤は二年ほど前までそこに何か書写されていたことには気がついていなかったものの、表側の「両点本法華経」の方を調査対象として利用するのみで、裏面の本文をきちんと読むことを怠っていた。

ところがたまたま何かの関係で再度その「両点本法華経」を調べ、目的の調査を終えて、ふと第二帖の裏側にほとんど平仮名で書かれていた本文を「読もう」と意識して読み始めたところ、奇妙な点に気づいた。変な箇所には濁点があるのである。

読み進めて行くに従い、そのような濁点は単なる間違いで

打たれたものとは考えられないほど頻繁に、かつ規則的に出現していた。そのとき私が想起したのはかつて名古屋大学大学院時代に高山倫明先生から教えを受けた清濁に関する一説である。それは早田輝洋氏の説で、過去の日本語では無声有声の対立のあるカサタハ行の子音は語中尾において全て有声音で実現しており、いわゆる清濁の対立は入り渡り鼻音の有無によつて表わされていたとするものである。またそのような現象は現代の東北方言等にも一部存在するという。

本資料では、語中尾において、現代共通語では清音である音が、非常にしばしば、濁点の付けられた形で表記されていた。私は直感的に、早田氏の想定したような日本語、または東北方言のような日本語を、現代共通語のように単に無声有声の対立を清濁の対立として捉え表記する人間が、耳で聞いて写し取ったものではないか、と感じたのである。

音韻史・表記史の分野には疎い身ながら、驚いた私はその後、本資料につき調査を始めるとともに、並行して翻刻し始めた。表側の「両点本法華経」自体無刊記の本であり、明確

な刊行年や発行者はわからない。そのため現時点で十分に解明できない事実も多いが、まずは本資料を紹介し、諸賢に本資料の姿を伝え、本資料がいかなる日本語を反映したものであるかを判断していただきたいと考え、ここに翻刻し紹介する次第である。

なお、本誌では許された紙数に限りがあるため、四回程度に分けて掲載することをお許し願う。

一 本資料表側「两点本法華経」の書誌

本資料は「两点本法華経」（大型本八帖）の第二帖裏面にほぼ全面に渡って書写されたものである。そのため、まずは表側の「两点本法華経」についてその書誌を記すこととする。

外形 縦二十七・八センチ、横九・〇センチの縦長で大型の整版本。折本八帖。

表紙 薄い杉板を芯にした紺色表紙。原裝。表紙の裏側には料紙を直接貼り付けている。

外題 左上部、四周双辺の元題箋に「輪宝紋」妙法蓮華經卷一（〜八）兩點」とあり。題箋は帖により一部ないし全部欠落。

内題 「妙法蓮華經序品第一 一（〜觀世音菩薩普門品第二十五 八）」「妙法蓮華經卷第一（〜八、尾題）」
料紙・版式 縦二十七・八センチ、横四十一〜四十二センチの雲母刷鳥の子様の紙を張り合わせ九センチ幅で

折本仕立てとしたもの。一折毎四行一行毎十七字詰。字高十九・〇〜五センチ。

刊記

なし、ただし以下の書き入れあり。

卷一（頭書空白部分に一折に一〜三字ずつ、以下「」は折の変わり目を示す）「朔日 爲禪法賢隆首座泉長泉寺什物奉納寄附者九世梅峰代料漆八卷之内」（以下所々に「二日〜四日」）

卷二（表紙見返し部分に）「爲翠顏妙柳大姉菩提」（頭書空白部分に）「五日」（以下所々に「六日〜八日」）

卷三（頭書空白部分に）「九日」（以下所々に「十日〜十二日」）

卷四（頭書空白部分に）「十三日」（以下所々に「十四日〜十六日」）

卷五（頭書空白部分に一折に一〜三字ずつ、なお「十」は「十」を見せ消ちとし右傍に「九」と訂正してあることを示す）「十七日 爲禪法賢隆首座泉長泉寺什物漆八卷之内長泉寺法用」（以下所々に「十八日〜廿日」）

卷六（頭書空白部分に一折に一〜三字ずつ）「廿一日 爲禪法賢隆首座泉長泉寺什物寄附奉納九世梅峰代料漆八卷之内」（以下所々に「廿二日〜廿四日」）

卷七（頭書空白部分に一折に一〜三字ずつ）「廿五日
爲／禪／法／賢／隆／首／座／長／泉／寺／什／物
／九世／梅／峰／代／料／漆／奉／納／寄／附／八
／卷／之／内」（以下所々に「廿六日〜廿七日」）
卷八（頭書空白部分に一折に一〜三字ずつ）「廿八日
爲／禪／法／賢／隆／首／座／長／泉／寺／什／物梅／
峰代／料漆／奉納／寄附／八卷／之内」（以下所々
に「廿九日〜晦日」）

刊記がないため刊行年や発行者は不明である。

田島毓堂先生著『法華経為字和訓の研究』（風間書房
一九九九刊）の「終章 あとがきにかへて」の「八 両点本
法華経」（同書二二五三〜二五九頁）にはこの種の「両点
本法華経」として十種が簡単に紹介されている。刊記のある
刊本は二種のみで、同書二二五九頁にある「⑥妙法蓮華経
改正新版両点句読（中型八冊 平楽寺版 万延二年一八六一
改刻 名古屋大学蔵）」が最古の刊記を有するものである。
他に明治十一（一八七八）年刊本（同頁⑩）もあるが、万
延二年刊本の刊記に「改正新版」「改刻」とあるのを見れば、
それ以前からこうした「両点本法華経」が既に刊行されてい
たものと推定され、江戸後期には既に普及していたようであ
る。

特にそのうち六種類については影印が示されているため比
較したところ、一二五四頁下段に示された「架蔵大乘妙典無
刊記両点本法華経」だけが内題の部分に「（前略）序品第

一 一」と巻数を示す漢数字がやや離れて刻されており、本
資料表側の「両点本法華経」と共通している。ただしこの影
印は一二五九頁に示されている「⑧大乘妙典（二冊中型本
架蔵）」に当たると考えられ、「二冊（帖？）中型本」である
点の本「両点本法華経」が八帖大型本である点と異なり、版
面は共通しても同じ刊本ではないようである。

また、書き入れのうち、日付は月毎の勤行日らしいが、本
経寄付の趣旨を記した中に「禪法賢隆首座」という僧名、「長
泉寺」という寺名、「九世梅峰」という僧？名が、また表紙
の見返し部分に故人の「翠顔妙柳大姉」という戒名など、い
くつかの固有名詞が現われている。これらについて種々調査
してみたが、現時点では特定の時代・地域・寺院・人物等に
まで到達できていない。諸賢の教示を請う。

二 本資料「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」について
次に本資料「仮名書梵網経菩薩戒（仮称）」自体について
示す。

本資料は前述した「両点本法華経」第二帖の裏面に、表面
とは前後を逆に、裏表紙から二折目までは空白のままとし、
三折目から書写し始め、百四十四折目まで書写してある。墨
付部分は合計百四十二折分であり、残った表表紙までの六折
分は空白のまま残されている。

外題はむろんなく、内題もはっきりしない。本文は一折に

つき五〜七行、一行三十〜四十字程度で、ほとんど平仮名で書写されているが、稀に「上」「正」「京」などの簡単な漢字が混じっている。その他朱墨（稀に黒墨）で句切りの点が書き加えられている他、かなり多く、元の文字を白墨で消したうえに書き直した箇所や、本文ないし語句・文字を別の楮紙に書いて上に貼り訂正した箇所がある。なお、本資料を調査中、上に貼って訂正した紙片が剥がれている箇所が四、五箇所あった。どこから剥がれたか現時点では不明であるが、今後前後の文脈から確定できるものがあればその都度報告したい。

墨付部分一折目には「かい京のげ」という題があり、その本文が四行分上下を空白に行をやや短くして書かれている。二折目には「ほんもを京、ぼさっかいの、ぢやう、（朱句切点を読点で示す。以下同）」という題があり、以下料紙の上から下まで全面を使って七折目二行目まで本文が書かれており、その本文が終わると一字空けて「ぼさかいの上、△△」と尾題らしきものがある。次の三行目から十五折目の最後までは別の本文が書かれている。十六折目に「ほんもう京、るしやな、ぶっせづ、しんち、ほうもんほん、だいじゆ、△△」と再度経自体の題があり、二行目半ばから「こうしん、さんぞう、ほうし、くもら、じゆ、やぐす、」とある。三行目からはまた本文の書写があり、そのまま百四十折の最後まで続き、百四十一折の一行目に一字分下げて「ほんもう京、るしやな、ぶっせづ、しんち、ほん、かんのげ、」とあつて

この経自体の本文は終わるようである。そして百四十一折の二行目中段に「ゑごう」とあつて、いわゆる「廻向文」が百四十二折目の四行目まで書かれて終わっている。

最初の「かい京のげ」と最後の「えごう」は別として、本体は十六折目から始まる「ほんもう京（中略）だいじゆ」であり、その前の「ほんもう京、ぼさっかいの、ぢやう」から「ぼさかいの上」までは経の序文だと推定される。経序の題は略称であると考えられるものの、本経下巻に限定した内容をよりの確に表わしていることを考慮し、本資料を「仮名書梵網経菩薩戒」と仮称することとした。

三 梵網経（菩薩戒）について

法華経について詳述の要はないと考えるが、「梵網経（菩薩戒）」については法華経ほど認知されていないと思うので、以下『大蔵経全解説大事典』（雄山閣一九九八年刊）の記述に拠り、関連する知識を適宜取捨選択して示す。

「ぶつ梵網経（ほんもうきやう）」（笠井哲氏執筆）に拠れば、同経は「梵網経盧舎那仏説菩薩心地戒品第十、菩薩戒經、梵網菩薩戒經ともいう」。「経名の「梵網」とは、諸仏の機に対して教えを設け病気に応じて薬を与えても漏らさないことがあたる大梵天王だいぼんてんの因陀羅網いんたらあむのようであったので名づけられたものである」。「盧舎那仏ろしゃなぶつは訳して淨満じゆまんといひ（中略）この仏が、因位の菩薩すなわち我々の修行のプロセスと

して身・口・意三業の防非止惡の制戒を述べられたものが本抄經なのである。「下卷には、正しく十重四十八經戒の戒相を一一こと細かに説明している。「下卷に説かれている十重禁戒と四十八經戒を合わせた、五十八戒の内容が非常に乱雑であるのは、もちろん真俗通戒すなわち出家在家を通じて遵奉すべく結誦されたからなのである。「なお本經の主旨が下卷にあるため、法藏・天台等は皆下卷のみを依用し、注疏を作った」などと説明されている。

最後にある「法藏」は中国唐代の華嚴宗を大成した僧であり、「梵網經菩薩戒本疏」という注釈書を作成している（同事典「833梵網經菩薩戒本疏」の項目参照）。また、「天台」は「天台大師智顛」を指し、中国南北朝時代の天台宗の大成者で、「菩薩戒義疏」という注釈書を作成している（同事典「1811菩薩戒義疏」の項目参照）。他にも空海が同經の大意を述べた「2246梵網經開題」や八世紀新羅の学僧大賢の「1815梵網經古迹記（ほんもうきょうこしゃつき）」などがあり、後者の同事典の項目「後世への影響」には、「天台・浄土などの系統では、智顛の菩薩戒義疏」82が用いられたのに対し、律・法相など日本の南都や真言の系統では、古来より本書が重用され、多数の注釈書が著わされた」とある。

「梵網經」は具体的に菩薩が守るべき大乘戒をまとめた經の一つとして、天台宗をはじめ諸宗派で読誦・研究されたようである。日本でも、それほど広く読まれたわけではないようであるが、上記注釈書類や後に紹介する「梵網經菩薩戒」

などが刊本として出版されており、「两点本法華經」の普及していた江戸後期においてもある程度は読まれていたことが推察できる。

四 本資料の原典について

本「仮名書梵網經菩薩戒（仮称）」は前述した「梵網經」のうち、後世主に読まれた下巻と「序」、さらには冒頭に「開經偈」、末尾に「廻向文」を加え、それらを合わせて訓読した「訓經」をほとんど平仮名で書きとめたものである、と推定される。こうした推定のもと、訓読の際に原典となった經本文を調査してみた。

最初に『大正新脩大藏經第二十四卷律部三』（大正十五〔一九二五〕年同刊行会發行）所載の「No.1284」の「梵網經盧舍那佛說菩薩心地戒品第十卷下」の本文と比較した。「開經偈」は別として、その次の「ほんもを京、ぼさツかいの、ぢやう、」の部分の原漢文に該当すると思われる「梵網經菩薩戒序」は存在した。しかし次の「ぼさかいの上、△△」以下經自体の題までに該当する原漢文はなく、下巻の經本文の原漢文が存在するだけであった。

このことから、この「ぼさかいの上」以下の部分に該当する原漢文を有する「梵網經（菩薩戒）」のテキストを探し始めた。たまたま「梵網經菩薩戒」という書名の刊本とある古書店目録に見付け、購入したところ、同書にはこの「ぼさ

かいの上」以下に該当する原漢文が本資料と同じ位置に存在していた。また梵網經下巻本文末にも「ぼんもう京、るしゃな、ぶっせづ、しんち、ほん、かんのげ」にほぼ相当する「梵網經盧舍那佛說菩薩心地品卷下」という尾題があり、同書が本資料の原典である可能性は極めて高いと思われる。

この「梵網經菩薩戒」も無刊記の版本であり、明確な刊年や発行者は不明である。以下簡単に同書の書誌を記す。

外形・縦二十七・五センチ、横十八・〇センチの美濃判袋綴製版本一冊。全三十二丁。

表紙 原裝。栗皮表紙。表表紙全面に「蓬心寺什物」と打ち付け書き。裏表紙にも中央部分に墨跡があるが判読不能。

外題 左上部にわずかに四周双辺の貼題箋が残る。「三字分亡失」戒經（以下三字分程度亡失か?）。

内題 「梵網經菩薩戒序」（一才巻頭）「菩薩戒序」（二ウ九）
「梵網經盧舍那佛說菩薩心地法門品第十」（四ウ二）
「梵網經盧舍那佛說菩薩心地品卷下」（三三二ウ九）
料紙・版式 楮紙。四周单边（内法縦二十・四センチ横十五・八センチ）一葉每九行一行每十七字詰。無界。

版心は中黒口花口魚尾に「梵 一（丁数）」。
刊記 なし。ただし匡郭外の頭書空白部分や経本文右傍等に内容に関する注釈的な書き入れが多数存在する。

五 翻刻本文凡例

架蔵「仮名書梵網經菩薩戒（仮称）」の原本を翻刻するに当たり以下の凡例に従う。

一、原本を可能な限り忠実に翻刻する。ただし変体仮名については「江」を例外として現行通用の平仮名に改める。文字の大小や位置についても原本に可能な限り従う。

二、原本にある朱墨（稀に黒墨）句切点は読点「、」として、それを擦り消した跡は振り仮名の「（）」として、本文の文字の右傍にある傍線は振り仮名の右横縦線「|」として、同じく黒丸点は振り仮名の「・」として翻刻する。

三、折本仕立のため、墨付部分の一折ごとに番号を付け、当該折本文の最初に（一〜百四十二）として示す。かつ一折ごとの行数を①〜⑦の丸囲み数字として行頭に示す。

四、さらに、原文の右側に原文の音訓に該当すると考えられる「梵網經菩薩戒」原漢文の漢字を「振り漢字」として示す。なお漢字の字体については止むを得ず通用の字体に改めたものがある。

四の二、ただし四の「振り漢字」が二の諸記号と重複する場合はその位置をさらに右側とする。

四の三、「梵網經菩薩戒」原漢文に原文の音訓に該当する漢字が存在しない場合は、加藤の判断に拠り該当する漢字を（ ）で囲って補う。

四の四、四の三と逆に「梵網經菩薩戒」原漢文に原文の音訓に該当しない漢字が余分に存在する場合は【*1】内に注記する。ただし長文に及ぶ場合は【*1】な
どと示し、当該の折の最後に補記する。

「仮名書梵網經菩薩戒（仮称）」翻刻

(一)

(開經偈)

① (約十二字分空白) かい京のげ

(無上 甚深 微妙 法)

② (約五分分空白) むちやうぢんじん、みめうの、ほうをわ、

(百 千 萬劫 遭遇 難)

③ (同前) ひやくせん、まんごうにも、あいをこと、かだし

(我今 見聞 受持 得)

④ (同前) われいま、けんもん、じゆじする、こどをゑん、

(願 如來 真實 義解)

⑤ (同前) ねがわくわ、によらいの、しんじつの、ぎをげせん、

(二)

梵網經菩薩戒序

① (同前) ほんもを京、ほさツかいの、ぢやう、

諸 佛 子等 掌 合 至心

② もろもろの、ぶツしとう、たなごころを、あわせで、しし

聽

んに、きぎたまい、

我今 諸佛 大戒 序 說 欲 衆

③ われいま、正ぶつだいかいの、上を、とがんとほつす、し

集 默

ゆあつまり、もく

然 聽 自 罪 有 知

④ ねんとして、きぎたまい、みつがら、つみあると、しらば、

當 懺 悔

まさに、さんげ、

⑤ すべし、さんげすれば、すなわち、あんらくなり、さんげ、

不

せざれば、

(三)

罪 益 深 罪 無 者 默 然

① つみ、ますくふかし、つみなぐんば、もぐねんせよ、

默 然 故

もんねん、するがゆ江に、

當 知 衆 清淨 諸 大

② まさに、しるべし、しゆ、正上なりと、もろくの、だい

徳 優婆塞 優婆夷 等

とぐ、うばそく、うば江、とう、

諦 聽 佛 滅 度 後 像 法

③あきらがに、きけ、ほとげ、めつどの、のち、ぞうぼうの、

中 於 應當

ながにおいで、まさに、

波羅提 木 又 遵 敬 波羅提 木

④はらだい、もぐしやを、ちん京、すべし、はらだいもく

又 者即

しやと、いッばすなわち、

是 此 戒 此 戒 持 時 闇

⑤これ、このかいなり、このかいを、たもつ、ときわ、あん

明 遇 如

にめうに、あいるが、ことく、

(四) 貧 人 寶 得 如 病 者

①びんにんの、たからをうるが、ことく、びやうじやの、

差 得 如

いゆることを、うるが、ことく、

囚 繫 獄 出 如 遠 行 者

②しうけの、ごくを、いつるが、ことく、おんぎよの、もの、

歸 得

の、かいることを、うるが、

如 當 知 此 則 是 衆

③ことし、まさにしるべし、これわ、すなわちこれ、しゆ

等 大師

とうの、だいしなり、

若 佛 世 住 此 異

④もし、ほどけ、よに、じゆし、たもととも、これに、こと

無也 怖心

なること、なし、ゐしん、

生 難 善 心 發 難 故

⑤正じがたし、ぜんしんおごり、かだし、かるがゆ江に、

經 云 小罪

京に、いわく、正ざい

(五) 輕 以 殃 無 爲 勿

①を、かろんじて、もつてとがなしと、すること、ながれ、

水 滴 微

みつの、しただり、び

雖 漸 大 器 盈 利 那

②なりと、ゐ江とも、よをやぐ、だいきにみづ、せつなの、

造 罪 殃 無

ぞうざい、とがむ

間 墮 一 人 身 失

③げんに、だす、ひとたび、にんしんを、うしなつれば、

萬劫

まんごうにも、

復 不 壯 色 停 不 猶

④ かいらず、さかんなる、いろの、とどまらざるわ、なを

奔 馬

わしる、むまの

如 人 命 無常 山

⑤ ごとし、ひとの、いのちの、む上なることわ、やまの、

水 於 過 今日

みつよりも、すぎたり、京わ

(六)

存 雖 明 亦 保 難

① ぞんと、ゐ江ども、あげんまで、まだ、たもちがだし、

衆 等 各 各

しゆどう、かツかぐ、

一 心 勤 修(ママ)精進 慎 懈怠

② いっしんに、ごんぐ 正じんして、つ、しんで、けだい

懶 墮 睡 眠

らんだ、すいみんして、

意 縦 勿 夜 即

③ ころを、ほしのままに、することながれ、よるわすなわ

心 攝

ち、しんのおさ

三 寶 存 念 以 空 過

④ めて、さんぼうを、ぞんねんせよ、もってむなしく、すぐ

徒

して、いだけ

疲勞 設 後代 深 悔

⑤ らに、ひろを、もをげ、のちに、ふこう、くゆること、

莫 衆 等 各 各

ながれ、しゆとう、かくく、

(七)

一 心 謹 此 戒 依 如 法

① いっしんに、つ、しんで、このかいに、よつてによほうに、

修 行

しゆぎよし、

應 當 學 菩薩戒 序

② まさに、とがぐすべし、ほさかいの上、△△

廬 舍 那 十 方 金 剛 佛 歸 命

③ るしやなど、十ッほうの、こんごう、ぶつとに、きめうし、

亦 前 論 主

たでまつる、まだ、ぜんろんしゆ、

當 覺 慈 氏 尊 礼 今 三

④ とうがく、じしそんを、らいし、たでまつる、いま、さん

聚 戒 說 菩薩

しゆの、かいを、とがん、ほさつ、

咸 共 聽 戒 大明 燈
⑤ ごとくぐ、ともに、きげ、かいわ、だいめう、とうの、
如 能 長 夜 闇
ごとし、よく、ちやうやの、あんを、

(八)

消 戒 真 寶鏡 如 法 照
① 正ず、かいわ、しんぼ京の、ごとし、ほを、てらして、
盡 遺 無
ことくぐ、なすこと、なし、
戒 摩尼珠 如 物 雨
② かいわ、まにしゆの、ごとし、もの_を、あめふらして、
貧窮 濟 世 離
びんきうを、すくう、よを、はなれで、
速 成佛 唯 此法 最
③ すみ、やがに、上ぶつすること、たゞ、このほう_を、さい
為 是 故 諸 菩薩
どす、このゆ江に、もろくの、ぼさつ、
應當 勤 護持 諸 大
④ まさに、つとめて、ごじ、すべし、 もろくの、だい
徳 春分 四月 日
とく、しゆんぶん、しがつの、ひ
一時 為 一月 日 已 過
⑤ を、もつて、いちじと、なす、いちげつひ、すでに、すぎ

一夜少 餘 一
で、いちや、かげたり、あまり、いち

(九)

夜 三月 日 在有 老 死 至
① やと、さんがつの、ひの、あるあり、ろをし、いだらんこ
近 佛法 滅
ど、ちかし、ぶっほう、めつしなん
欲 諸 大徳 優婆塞 優婆夷
② と、ほつす、もろくの、だいとく、うばそく、うば江、
得道 為 故 一心
とくどう_をの、ための、ゆ江に、いっしん
勤求 精進 所以者 何 【諸佛一心】
③ に、ごんぐ、正じんせよ、ゆ江わ、いがんと、なれば、
勤求 精進 故
ごんぐ、正じん、したもをが、ゆ江に、
阿耨 多羅 三藐 三 菩提 得
④ あのが、たら、さんみやく、さんぼだいを、江だまいり、
何 況 餘 善
いがに、いわんや、よの、ぜん
道 法 各 聞 強健 時
⑤ どのの、ほうをや、おのく、きけ、ごうけんのだき、
努力 善 勤修
つとめで、ぜんを、ごんしゆ_を、すべし、

如何 道 求 不 安 須
⑥ いが^きんぞ、^きどうもどめ、ざらんや、いづぐんぞ、まち、
待 可 老 何 樂
まづべきや、をいて、なんの、たの

(十)

欲 乎 是 日 已 過

① しみ、をが、ほつするや、このひも、すでに、すぎぬれば、
命 亦 隨

めいも、まだ、したがって、
減 少水 魚 如 斯 何 樂

② げんず、正すいの、うをの、ごどし、こ、に、なんの、たの

有【*1】

しみか、ある、(五分分空白)

戒 持 身 口 淨 心 攝

③ かいを、じして、しんく^を上じて、しんを、^をさめで、
正憶 念 多聞

正をぐねん、すべし、たもんに、

實 智 生 斯 戒 本

④ して、じつちを、正ずること、これ、かいを、ほんと、
為 由 戒 妙 法

なるによる、かいわ、めうほう

藏 為 亦 出 世 財 為 戒

⑤ の、ぞうたり、まだ、しゆつせの、ざいたり、かいわ、

大舟 船 為 能 生死

だいしゆ、せんたり、よく、正じの、

【*1】「此中未受菩薩戒不清淨者已出衆今和合欲作何事

「三問」不來囑受菩薩有幾人説欲及清淨衆當一心聽」とい

う原漢文あり。なお「」内は割注部分を示す。」

(十一)

海 渡 戒 清涼 池 為

① うみを、どうす、かいわ、正りやうの、いけたり、
諸 熱惱 澡浴

もろくの、ねづのを、そうよくす、
戒 無畏 術 為 邪毒 害 消伏

② かいわ、むるの、じづたり、ぢやどくの、かいを、正ぶぐ
戒 究竟 伴 為

す、かいわ、く京の、ほんたり、
能 險 惡 道 過 戒 甘

③ よく、けんなくの、どうを、よぎら、しむ、かいわ、かん
露 門 為 衆 聖之

ろの、もんだり、しゆ正の、
遊 所 持 戒 心 高

④ あそび、たもを、とごろ、じがいにして、こ、ろ、たがふ
不 專 精

らず、せん正に、して、
放 逸 不 正 戒 相 取 不 亦

⑤ ほうゑづ、ならず、正かいの、そうをも、とらず、また、

邪念 心 無

ぢやねんの、しんも、なき、

是 清淨 戒 名 諸佛 稱讚【所】

⑥これを、正上の、かいど、なづく、正ぶつに、正さんせる、

持戒 心 悔

じがいに、して、こゝろ、くい、

(十二)

不 所願 亦 成就 戒 法城

①せざれば、正がんも、また、上ぢゆす、かいわ、ほう上の、

塹 為 能 煩惱

ほりげ、たり、よく、ほんのの、

賊 遮 戒 勇猛 將為 魔軍

②ぞくを、しゆす、かいわ、ゆうめうの、正たり、まぐんの、

衆 催伏 戒 如

しゆを、さいぶぐす、かいわ、によ

意珠 為 能 商人 寶 與 戒

③みじゆたり、よく、正にんに、たがらを、あとを、かいわ、

妙樓 觀 為 諸

めうろ、かんたり、もろくの、

三昧 遊 戲 持戒 平地 為

④ざんまいに、ゆうけんす、じがいを、へいちと、なし、

禪定 屋 宅 為

能 智慧 光 生 次第 明照 得

⑤よく、ちゑの、ひかりを、正じて、しだいに、め正をう、

定慧 力 莊嚴

上江の、ちから、正ごん、

⑥して、まんぎよ、ぐそく、するこをなし、ないし、ぶづ

道 成 萬行 具足 為 乃至佛

どうを、上ずること

(十三)

悉 猶 戒 本 為 是 故

①も、ことくぐ、なを、かいを、ほんとす、このゆ江に、

有智 人 堅心 戒

うちの、ひとわ、けんしんに、かい

守護 寧 身命 喪 失

②を、しゆごして、むしろ、しんめうを、そう、じゆすとも、

慎 所犯 有

つ、しんで、正ほん、ある

③ごど、ながれ、じつしの、そう正を、あわせでしやくし、

子 供養 勿 十指 爪掌 合 釋 師

しをくようし、たでまつり、

我今 説 戒 欲 衆 當

④われいま、せツかい、せんと、ほッす、しゆ、まさに、

- 64 -

一心 聽 乃至

いっしんに、きぐべし、ないし、

小罪 中 心 應 大 怖畏

⑤ 正しいの、ながにも(こ)ころ、まさに、お江に、ふ江、すべ

罪有 一心

し、つみあらば、いっしん

悔 後 更 復 犯 不

⑥ に、く江て、のちに、さらに、まだ、をがす(こ)こと、ながれ、

心 馬 惡 道

しんめ、あくどうに、

(十四)

馳 放逸 禁制 難 佛

① はせで、ほ江(こ)づにして、きんぜい、しがだし、ほとげの、

説 切

とき、たもを、せづなる、

誠 行 亦 利 讐 勒 如 佛 口

② かい京、まだ(こ)よぎ、びろくの、ごとし、ほとげ、くちづ、

説 戒 教

がら、と江で、かいを、おし

善 者 能 信 受 是 人

③ 江、たもを、ぜんじや、よく、しんじゆ、せば、このひと、

馬 調 順 【*2】 生死

め、ちやうちゆんに(こ)して、正じ

軍 没 在 若 人 戒 守

④ の、ぐんに、もづざい、せり、もし、ひと、かいを、しゆ

護 聲 牛 尾 愛

ご、すること、もをく(こ)の、おをあ

如 心 繫 放 逸

⑤ いするが、ごとく、ころを、つないで、ほういづ、なら、

不 亦 猴

ざること、まだ、さるに、

鑠 著 如 日 夜 常 精

⑥ くさを、つけ、だるが、ごとし、にちや、つねに、正

進 實 智 恵

じん、して、じちゑ

【*2】「能破煩惱軍若不受教勅亦不愛樂戒是人馬不調」

という原漢文あり。一行分の目移りに拠るか。」

(十五)

求 故 是 人 佛 法 中

① を、もどむるか、ゆ江に、このひと、ぶつほうの、ながに、

能 清 淨 命 得 諸

よく、正上の、めをう(こ)、もろく

大 德 今 十 五 日 布 薩 作

② の、だいとく、いま、じゆご、にちに、ふさづを、なし、

優 婆 塞 優 婆 夷 【菩 薩】 戒 説

うばそく、うば江の、かいを、とく、

衆 當 一 心 善 聽 罪 有 者

③しゆ、まさに、いッしんに、よぐ、きくべし、つみあらば、

發 露 罪 無 者

ほつろせよ、つみ、なぐんば、

默 然 默 然 故 當 知

④もくねんせよ、もくねん、するが、ゆ江に、まさに、しる

諸 大

べし、もろくの、だい

德 清淨 優婆塞 優婆夷 菩薩戒

⑤とく、正上に、して、うばそく、うばゑの、 かいを、

説 堪 已 菩

とくに、たいたり、すでに、ほ

薩 戒 序 説 竟 〔*3〕

⑥さツかいの、上を、とき、をわんぬ、(約半分空白)

〔*3 今問諸大德是中清淨不「如是三問」諸大德是中

清淨默然故是事如是持臨昇座白大衆云「某甲」稽首和南敬

白大衆僧差誦戒恐有錯悞願同誦者指示誦戒畢云「某甲」敬

謝衆僧差誦戒三業不勸戒文生澁坐久延遲令衆生惱願衆慈

悲布施歛喜」という原漢文あり。】

(十六)

梵 網 經 盧 舍 那 佛 説 菩薩 心 地 法 門

①ぼんもう京、るしやな、ぶつせつ、 しんち、ほうもん

品 第 十

ぼん、だいじゆ、△△△

後 秦 三 藏 法 師 鳩 摩 羅

②(約十四字空白) こうしん、さんぞう、ほうし、くもら、

什 譯

じゆ、やぐす、

尔 時 盧 舍 那 佛 此 大 衆 為

③そのときに、るしやなぶつ、この、だいしゆの、ために、

略 百 千 恒 河 沙

りやくして、ひやくせん、ごがしや、

不可説 法 門 中 心 地 開

④ふかせつの、ほうもんの、ながの、しんちを、ひらぎ、

毛 頭 許

たもを、こど、もをとう、ばかりの、

如 是 過 去 一 切 佛 已

⑤ごどし、これ、かごの、いッさいの、ほどけ、すでに、

説 未 來 佛

とき、たもを、みらいの、ほどけ

⑥も、まさに、とぎたもを、げんざいの、ほどけも、いま

説 三 世

とぎたもを、さんぜの、

(十七)

菩 薩 已 學 當 學 今

①ぼさつ、すでに、かくしぎ、まさに、かくすべし、いま、

學 我 已

がくす、われ、すでに、

百 劫 是 心地 修行

②ひやくこに、この、しんちを、しゆ京せしをもつて

吾 号 盧舎

われを、ごをして、るしや

那 為 汝 諸佛 我 所説 轉

③など、なす、なんぢ、正ぶつ、わが、正せつを、てんじて、

一切 衆生 與

いっさい、しゆ上の、ために、

心地 道 開 時 蓮華

④しんちの、どうを、ひらげ、たもを、ときに、れんげ、

臺 藏 世界 赫赫

たいぞう、せがいの、かくく

天 光 師子 座上 盧舎 那 佛 光 光

⑤たる、てんこ、しし、ぎ上の、るしやな、ぶつ、こをこを、

放 千華 上

はなつて、せんげ、正の、

佛 告 我 心地 法門

⑥ほどげに、つげ、たまわく、わが、しんち、ほうもん、

品 持 而 去

ぼんを、たもつて、しかも、さつて

(十八)

復 轉 千百(ママ) 億 釈迦 及

①まだ、てんじて、ひやくせん、をくの、しやが、および、

一切 衆生 為 次

いっさい、しゆ上の、ために、し

第 我 上 心地 法門 品 説

②だいにわが、かみの、しんち、ほうもん、ぼんを、といて、

汝等 受持 説

なんぢ、じゆじし、どく

誦 一心 而行 尔 時 千華

②じゆして、いっしんに、京ぜよと、そのときに、せんげ

上 佛 千百(ママ)

正の、ほとげ、ひやくせん、

億 釋迦 蓮華藏 世界 赫赫

④をくの、しやが、れんげぞう、せがいの、かくくたる、

師子 座從 起 各 各

しし、ざより、たつて、をのく、

⑤じして、た江んとのこをしんより、ふかしぎの、こうく

放 皆 無

を、はつなて、みなむ

⑥りやう、ぶつを、けして、いちじに、むりやうの、正を、

量 佛 化 一時 無量 青黄

赤白華

しやくびやくの、はなを、

(十九)

以 廬舎 那 佛 供養 上 所説

①もって、るしやな、ぶつを、くようし、かみの、正・せづの、

心地 法門 品

しんち、ほうもん、ほんを、

受持【寛】各 各 此 蓮 華藏 世界 従而

②じゆじし、をのくこの、れんげぞう、せがいより、

没 没 已【*4】體

ぼつし、ぼつし、をわって、たい

性 虚空華光 三昧 従 出

③正、こくけこ、ざんまい、よりいでぬ、

出 已 方 金剛 千光 王座

いでをわって、まさに、こんご、せんこ、おざ

坐 及 妙光堂 十世界

④に、ざし、をよび、めうこ、どうに、してじゆせがい、

海 説 復 座従

かいを、とき、まだざより、

⑤たッて、たいしやく、きうに、いたッて、じゆくを、

説 復 燄 天 中 至

とき、まだ、ゑんてんの、ながに、いだッて、

十行 説 復 座従 起 第四天

⑥じゆ京を、とき、まだ、ざより、たッて、だいし、てんの、

中 至 十廻

ながに、いだッて、じゆ江

【*4 「入體性虚空華光三昧還本原世界閻浮提菩提樹下」という原漢文あり。重複部分に拠る日移りか。】

(二十)

向 説 復 座従 起 化樂 天 至

①ごを、とき、まだ、ざより、たッて、けらぐてんに、いた

十 禪 定 説 復

ッて、じゆぜん上を、とき、ま

座従 起 他化天 至 十地

②だ、ざよりたッて、たげてんに、いたッて、じつちを、

説 復 一 禪 中

とき、まだ、いちぜんの、な

至 十 金剛 説 復 二 禪

③がに、いだッて、じゆ、こんごを、とき、まだ、にぜんの、

中 至 十忍

ながに、いたッて、じゆにん

説 復 三 禪 中 至 十

④を、とき、まだ、さんぜんの、ながに、いたッて、じゆ

願 説 復 四 禪

がんを、とき、まだ、しぜん

- 68 -

中 摩醯 首羅 天王 宮 至

⑤の、ながの、まげい、しゆら、てんのを、ぎうに、いたッ

我 本 原 蓮

てわが、ほんげんの、れん

華藏 世界 廬舎 那佛 所説 心地

⑥げ、ぞう、せがいの、るしやなぶづ、正せづ、しんち、

法門 品 説

ほもんほんを、ときたもを、

(二十一)

其餘 千百 億 釋迦 亦復

①そのよの、せんひやく、をくの、しやがも、まだく、

是 如 無二 無別

かくの、ごとぐ、むに、むべつ、

賢劫 品 中 説 如

②なり、けんごを、ほんの、ながに、とくが、ごとし、(約

十一字分空白)

尔 時 釋迦 初 蓮 華藏 世界

③その、ときに、しやが、はじめで、れんげ、ぞう、せがいに、

現【從】東方 來

げんじ、とうぼうより、きたッて、

天宮 中 入 魔受 化經 説 已

南閻 浮提 迦夷羅

に、なんゑん、ぶだいの、か江ら、

國 下生 母 摩耶 名 父

⑤ごくに、げ正し、たもを、は、を、まやと、なづげ、ち、

白 淨 字 吾

を、びやく上ど、なづげ、われを、

悉達 名 七歳 出家 三

⑥しつたと、なづぐ、しづさいに、して、しゆッけし、さん

十 成道 吾

じゆに、して、上どうす、われを、

(二十二)

号 釋迦 牟尼佛 爲 寂 滅

①ごをして、しやが、むにぶつと、なす、じやく、めづ、

道場 於 金剛 華光

どう上に、をいで、こんごう、けこう、

王座 坐 乃至 摩醯 首羅 天王 宮

②をぎに、ぎす、ないし、まげい、しゆら、てんのを、きう

其中 次第 十

に、して、そのながしだいに、じゆ

住處 説 所 【時】佛

③の、じゆ正に、して、とく、ところ、なり、ほどげ、

諸 大梵 天王 網羅

もろくくの、だいほん、てんのをの、もをら、

幢 觀 因 爲 説 無量

④どうを、みで、よッて、ために、とき、たもを、むりやう

世界 猶 網 孔 如

の、せが、い、なを、もをくの、ごとし、

一一 世界 各各 不同 別異

⑤ いちくくの、せが、い、かくく、ふどう、べつ江、なる、

無量 佛 教門

こと、むりやうなり、ほどげの、京もんも、

亦 復 是 如 吾 今 此 世界

⑥ まだく、かぐの、ごとし、われ、いま、この、せがいに、

來 八千 反

きたる、こと、はッせん、べんなり、

此 娑 婆 世界 為 金 剛 華 光

⑦ この、しやば、せがいの、ために、こんごう、けこう

王座 坐 乃至 魔醯 首

をぎに、さす、ないし、まげい、しゆ

(二十三)

羅 天 王 宮 是 中 一切

① ら、てんのを、きうに、して、この、ながの、いっさいの、

大 衆 為 略 心 地

だいしゆの、ために、りやくして、しんちを、

開 竟 復 天王 宮 從

② ひらぎ、たま、い、をわんぬ、まだ、てんのう、きうより、

下 闍 浮 提 菩提 樹 下

くだって、江んぶ、だいの、ほだい、じゆげ

至 此 地上 一切 衆 生 凡 夫

③ に、いたって、この、ち正の、一ッさいしゆ上、ほんぶ、

癡闇 之人 為 本 盧舍 那 佛

ちあん、ひとの、ために、ほん、るしやな、ぶつ

心 地 中 初發 心 中 常

④ の、しんちの、ながの、正ほッしんの、ながより、つねに、

誦 所 一戒 光

じゆし、たもを、とごろの、一かい、こう

明 説 金剛 寶 戒 是 一切

⑤ めうを、とく、こんごう、ほうかいわ、これ、一ッさい

佛 本 原 一切 菩薩 本

ぶづの、ほんげん、一ッさいぼさづの、ほん

原 佛【性】種 子 一切 衆 生 皆 佛

⑥ げん、ぶツ しゆしなり、一ッさいしゆ上、みな、ぶツ

性有 一切 意識 色 心

正あり、一ッさいの、るしぎ、しぎしん、

(二十四)

是 情 是 心 皆 佛 性 戒 中

① この上、このしん、あるわ、みな、ぶツ正、かいの、なが

入 當 當 常 因

に、いるべし、まさに、つねに、江ん、

有 故 當 當 常住 法 身 有 是

② あるが、ゆ江に、まさに、上じゆの、ほッしんあり、かく

如 十 波羅提 木 叉

の、ごどぎの、十ッばらだい、もくしや

世界 於 出 是 法戒 是三

③を、もって、せがいを、いづ、この、ほかいわ、これさん

世 一切 衆 生 頂 戴 受 持

せ、一ッさいの、しゆ上、ちよだい、じゆじ、

吾 今 當 此 大 衆 為

④すべし、われいま、まさに、この、だいしゆの、ために、

重 十無盡 藏 戒

かさねて、十むじん、ぞうかい、

品 説 是 一切 衆 生 戒

⑤ほんを、とぐべし、これ、一ッさい、しゆ上、かいの、

本 原 自性 清浄

ほんげん、じ正、正上なり、(約三字分空白)

我 今 廬 舍 那 方 蓮 華 臺 坐

⑥われいま、るしやな、まさに、れんげたいに、ぎす、

周 匝 千 華 上

しゆそうせる、せんげ、正に、

⑦まだ、せんの、しやがを、げんず、一ッけに、百をくの、

國 一 國 一 釋 迦

くにあって、一ッこくに、一ッしやが、

(二十五)

各 菩提 樹 坐 一時 佛

①あり、をのく、ほだい、じゆに、ざして、一じに、ふづ

道 成 是 如

どうを、上ず、かぐの、ごどぎの、

千 百 億 廬 舍 那 本 身 千

②せんひやく、をくわ、るしやなの、ほんしんなり、せん

百 億 釋 迦 各

ひやく、をくの、しやが、をのく、

微塵 衆 接 俱 我 所

③みじんの、しゆを、せつして、ともに、わが、ところに、

來 至 我 佛 戒 誦

らいして、わが、ぶっかいを、じゆ

④するを、き江で、かんろの、もん、すなわち、ひらげぬ、

是 時 千 百

この、ときに、せんひやく、

億 還 本 道 場 至 各

⑤をく、かいて、ほんどう、上に、いだって、をのく、

菩 提 樹 坐 我 本

ほだい、じゆに、ざして、わが、ほん

師 戒 十 重 四 十 八 誦 戒

⑥し、かいの、十じゆ、四十八を、じゆす、べし、かいわ、

明 日月

あきらが、なる、じつげつの、

(二十六)

如 亦 瓔 珞 珠 如 微 塵 菩

①ごとく、まだようらく、しゆの、ごとし、みじんの、ほ

薩 衆 是 由 正 覺

さつしゆ、これに、よつて、正がく

成 是 廬 舍 那 誦 我

②を、上ず、これ、るしやな、じゆし、たもを、われも、

亦【如是】誦 汝 新 學

まだ、 じゆす、なんぢ、しんがく

菩 薩 頂 戴 戒 受 持

③の、ほさづも、ちよだい、して、かいを、じゆじ、すべし、

是 戒 受 持

この、かいを、じゆじし

已 轉 諸 衆 生 授

④をわつて、てんじで、もろくの、しゆ上に、あどを、

諦 聽 我

あざらがに、きげ、われ、

正 佛 法 中 戒 藏 波 羅 提

⑤まさしく、ぶつほうをの、ながの、かいぞうの、はらだい、

木 叉 誦

もく、しやを、じゆ

大 衆 心 諦 信 汝

⑥すべし、だいしゆ、しんに、たいしん、せよ、なんぢ

是 當 成 佛

これ、とう上の、ほど

我 是 已 成 佛 常

⑦げなり、われわ、これ、ゐ上の、ほどげなり、つねに、

是 如

かぐの、ごどくの、

(二十七)

信 作 戒 品 已 具 足 一

①しんを、なせば、かいほん、すでに、ぐそくしめ、一

切 心 有 者

さい、こゝろある、ものわ、

皆 應 佛 戒 攝 衆 生 佛

②みな、まさに、ぶかいを、じゆす、べし、しゆ上、ぶつ

戒 受 即 諸

かいを、うぐ、ればすなち、正

佛 位 入 位 大 覺 同

③ぶづの、くらいに、いる、くらい、たいかくに、をな、

已 真

じうし、をわる、まごどに、

是 諸 佛 子 大 衆 皆 恭 敬

④これ、正ぶづの、みごなり、だいしゆ、みなく京、して、

至心 聽 我
ししんに、きく、われ

誦

⑤じゆせんとの、たもを、△△△(約十七字分空白)

爾 時 釋迦 牟尼佛 初 菩提

⑥その、ときに、しやが、むにぶづ、はじめで、ほだい、

樹下 坐 無上(正)覺

じゆげに、ざして、む上、正 かくを、

(二十八)

成 初 菩薩 波羅提 木 又 結

①上じ、はじめに、ほさづの、はらだい、もくしやを、けし

父母 師僧 三

て、ふほ、しそ、さん

寶 孝順 孝順 至道 之

②ほうに、こをじゆんせしむ、こうじゆんわ、しどうの、

法 孝 名

ほうなり、こうを、なづ、

戒 為 亦 制止 名 (佛)

③げで、かいど、なし、まだ、せいしと、なづぐ、ほどげ、

即 口

すなわち、みぐち、より、

無量 光明 放 是 時

④むりやうの、こうめうを、はなち、たもを、この、ときに、

百万億 大
百まんぐの、だい

衆 諸 菩薩 十八 梵(天) 六 欲

⑤しゆ、もろくの、ほさづ、十八、ほんでん、ろぐ、よぐ、

天子 十六 大國

てんし、十六、だいくぐ、

王 合掌 至心 佛 一切

⑥のを、がッ正、して、し、しんに、ほどげの、一ッさい、

(諸)佛 大乘 戒

正 ぶつの、だいで、かいて、

誦 聽 (佛) 諸 菩薩

⑦じゆじたもを、きかんとす、ほどげ、もろくの、ほさづ

告 言

に、つげて、の

(二十九)

我 今 半月 半月 自

①たま、わく、われ、いま、はんがつ、はん、みつがら、

諸佛 法戒(ママ) 誦

正ぶつの、かいほうを、じゆす、

汝等 一切 發心 菩薩【亦誦】乃至

②なんだち、一ッさい、ほッしんの、ほさづ、 ないし、

十發趣 十長養 十金剛

十ッほしゆ、十ッちよよ、十ッこんこう、

十地 諸 菩薩 亦 誦

③十ツちの、もろくの、ぼさづも、まだ、じゆす、べし、

是故 戒光 口

このゆ江に、かいこう、くち

従出 縁有 因無 非 故

④より、いづ、ゐんあり、ゐんなきに、あらざるが、ゆ江に、

光 光 青黄 赤

こうこわ、正を、しやぐ、

白 黒 非 色 非 心 非

⑤びやくこくに、あらず、しぎに、あらず、しんに、あらず、

有 非 無

うに、あらず、むに、

非 因果 法 非 (是) 諸佛 之

⑥あらず、ゐんがの、ほうに、あらず、これ、正ぶつの、

本原 菩薩 道

ほんげん、ぼさつの、どう

行 之 根本 是 大衆 諸佛 子

⑦を、京、ずるの、こんほん、これ、だいしゆ、正ぶつし

之 根本 是 故

の、こんほんなり、このゆいに、

(三十)

大衆 諸佛 子 應 受 持 應

①だいしゆ、正ぶつし、まさに、じゆじ、すべし、まさに、

読誦 (應)

どくじゆ、すべし、まさ

善學 佛子 諦 聽

②に、ぜんがく、すべし、ぶつし、あきら、がに、きけ、

若 佛 戒 受

もし、ぶつ、かいを、うげん、

者 國王 王子 百官 宰相 比丘 比丘尼

③ものわ、こごおう、を、じ、百かん、さい正、びく、びくに、

十八 梵 [天]

十八、ほんでん、

六欲 天子 庶民 黄門 姪男

④ろぐよく、てんし、しやみん、こうもん、ゐんなん、

姪女 奴婢 八

ゐんによ、ぬび、はち

部鬼神 金剛 神 畜生 乃至 變化

⑤ぶきじん、こんごう、じん、ちく正、ないし、へんげ、

人 但

じん、までも、た、

法師 語 解 盡 戒 受 得

⑥ほつしの、ごを、げして、こどくぐ、かいを、じゆとく、

皆

すれば、みな、

(三十一)

第一 清浄【者】名

① だいい、正上と、なづく、(約二十二字分空白)

佛 諸 佛子 告 言

② ほどげ、もろくの、ぶッしに、つげで、のたまわく、

十重 波羅提 木 又 有

十じゆ、はらだい、もくしや、あり、

若 菩薩 戒 受 此 戒 誦 不

③ もし、ほさっかいを、うげてこの、かいを、じゆせん、

者 菩薩 非 佛種

ものわ、ほさづくに、あらづ、ぶッしゆ、

子 非 我 亦 是 如 誦

④ しに、あらず、われも、まだ、かぐの、ごとく、じゆす、

一切 菩薩 已 學

一ッさいの、ほさづく、すでに、がく

一切 菩薩 當 學

⑤ しぎ、一ッさいの、ほさづく、まさに、がく、すべし、

一切 菩薩 今 學【我】已

一ッさいの、ほさづく、いま、がくす、す

略 (菩薩) 波羅提 木 又

⑥ に、りやくして、ほさづく、はらだい、もく、しやの、

相貌 説 應當 學

そうめうを、とく、まさに、がくす、

(三十二)

敬心 奉持

① 京しんを、もって、ぶじ、すべし、(約十八字分空白)

(「その一」は以上)

〔参考文献〕

鎌田茂雄他編『大藏経全解説大事典』雄山閣一九九八

大正新脩大藏经刊行会『大正新脩大藏经第二十四卷律部三』

一九二五

田島毓堂『法華経為字和訓の研究』風間書房一九九九

早田輝洋「生成アクセント論」(大野晋・柴田武編『岩波講

座日本語5音韻』岩波書店一九七七所収)

船山徹『東アジア仏教の生活規則』梵網経 最古の形と発展

の歴史』臨川書店二〇一七

堀川貴司『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む』勉誠出

版二〇一〇

〔付記〕翻刻に当たり、都留文科大学大学院文学研究科国

文学専攻生菅野愛美さん、田浦佳奈さんの助力を得た。

記して感謝申し上げます。

